

関東大震災の翌年

早稲田大学 研究院教授・建築学
松村 秀一
Shuichi Matsumura

耐震壁

今の私の職場は早稲田大学の喜久井町キャンパスにある。あまり知られていないこのキャンパスには新旧複数の建物があるが、特に私の部屋が入っている建物には由緒がある。名称は「内藤博士記念耐震構造研究館」。

一九五七(昭和三十二年)、長年早稲田大学で教鞭をとられた内藤多仲先生(以下敬称略)が定年した際に集まった卒業生他からの寄付を原資に建てられた鉄筋コンクリート造三階建ての建物である。だから、この建物のエントランスの袖壁には内藤多仲の胸像が埋め込ま

れている。そして、私の部屋の隣の部屋は、扉の上のプレートを見る限り、今も尚内藤の部屋である。扉を開くと、そこには内藤の机があり、作り付けの本棚があり、戦前のノートや文献、内藤が設計した通天閣の工事写真、東京タワーの青焼き図面等々、内藤の資料が所狭しと並べられており、壁にかけられた内藤の肖像画がそれらを見つめている。

その内藤多仲は、東京タワー、通天閣、名古屋テレビ塔、さつぽろテレビ塔等、俗に「タワー六兄弟」と呼ばれる塔たちの設計者としても著名だが、内藤の業績や資料に詳しい山田眞早稲田大学名誉教授によると、「耐震構造の父」でもある。(山田眞、「塔博士・内藤多仲」そ

の足跡」、「大塚葉報」、No. 674、大塚製菓、2012年4月)
山田名誉教授によれば、とりわけ「耐震壁」の着想とその理論化及び実践こそ「父」たるに相応しい内藤の業績である。詳細については、前掲の「塔博士・内藤多仲」その足跡」を「ご覧頂きたいが、「耐震壁」の着想の経緯に関する部分をまとめると概ね以下のようなことになる。

内藤は一九一七(大正六)年に一年間念願だったアメリカ留学を果たすが、耐震的な構造についての手掛かりは得られなかった。帰国してから、アメリカ移動中に中仕切りを外したトランクが破損したこと、帰国時のアリニューシャン沖の嵐でも船

はデッキや隔壁構造に守られて大丈夫だったことにヒントを得て、建築の耐震化に壁体を利用する着想に至ったというのである。その後内藤は耐震壁の理論化に取り組み、自らの理論を用いて構造設計した旧日本興業銀行本店と旧歌舞伎座が関東大震災で殆ど無被害であったことも手伝って、内藤の名は一躍有名になった。

明治の帝大卒業生たち

内藤多仲は東京帝国大学建築学科の第三〇回卒業生。一九一〇(明治四十二年)卒である。現在発行されている東京大学建築学科の同窓会名簿によると、同級生は一四名。内藤の他に、安井建築設計事務所創業者の安井武雄や東京高等学校(東京工業大学の前身)で建築学科長を務めた土居松市等がいる。学年ごとの人数は、この五年前に初めて二桁になるが、その前は僅か数名という少数教育であった。内藤が同じ製図室にいたであろう三



大正13年の内藤多仲の学年の同窓会記録・「斯美会」巻物より
(写真:山田眞早稲田大学名誉教授)

年上、後に東京帝国大学総長になる内田祥三の学年はたった六名だし、二年上、その後旧日本興業銀行本店の建築設計でコンビを組むことになる渡辺節の学年も八名に過ぎない。一年上、豊多摩監獄(後の中野刑務所)の設計でも知られる後藤慶二や、日建設計の母体である長谷部竹腰建築事務所の創設者長谷部

も前後数年の先輩後輩とは親しく付き合える規模だったろうし、学年数十名の今日とは比べ物にならない程に同級生の結び付きは強かったに違いない。

大正十三年の同窓会

内藤の部屋には、そうした同級生の結び付きの強さを示す有力な証拠が残っている。内藤の学年の同窓会「斯美会」の、どうやら一九二四

(大正十三)年の宴会(?)記録とも言える巻物である。写真はその巻頭部分を写したのだが、山田眞先生によれば、絵も達者だった同級生が描いたものらしい。
大正十三年と言えば、関東大震災の翌年。それ故巻頭はこの絵になったのだろう。大地震から二カ月後に他界した地震学者大森房吉の命日に関東一円の鯨が集まり「百年目に又参りましょうか?」、「日本人は案外小国民だよ!!」等と言っている。

この巻物は、ここから何メートルも続く。いくつかの会合の折々に同級生たちが書き連ねたものを繋いで一本にしたのだろう。鯨の絵の後には「ポートランドセメント協会創立」とあり、初代会長に土居松市が指名されている。その後は漢詩あり、全員が集まった様子のスケッチあり、猥画らしきものありと、内容は多様で豊か。専門を越えての賑やかな議論が聞こえてきそうである。
コロナ禍を乗り越えたことでもあり、百年後の私たちもこういう横議の場を持ちたいものである。